

GDM と妊娠中のグルカゴン動態について

◎上甲 紗愛¹⁾、橋本 卓也¹⁾
浜松医科大学 医学部附属病院 検査部¹⁾

【背景】妊娠糖尿病（GDM）は妊婦や胎児のリスクファクターとなり、GDMを診断し血糖を適切にコントロールすることは、胎児や妊婦の合併症予防や将来2型糖尿病になるリスクを減らすことにつながる。近年糖尿病患者において、耐糖能異常にインスリンだけでなく血糖値を上げるグルカゴンの関与も重要であると報告されており、注目が集まっている。今回我々は、妊婦やGDM患者における耐糖能にグルカゴンがどう関与しているのか明らかにするために本研究を行った。

【目的】本研究の目的は、妊婦において、グルカゴン動態がどのように耐糖能に関係しているか明らかにすることである。

【方法と対象】対象は2013年～2015年に本院にて75g糖負荷試験（OGTT）を受けた24～31週の妊婦58名である。50g OGTTスクリーニングでGDMが疑われた患者に一晩絶食後75g OGTTを行った。空腹時（0分）、ブドウ糖負荷後15分、30分、60分、90分、120分における血糖、インスリン、グルカゴン濃度を測定した。

【結果】非GDM患者群とGDM患者群の間には、グルカゴン濃度・グルカゴン変化率ともに有意差は認められなかった。しかし、GDM患者群において食事療法のみ群（Diet群）とインスリン治療を有した群（Insulin群）では血糖、インスリン、グルカゴン濃度に変化は認められなかったものの、グルカゴン変化率において有意な差が認められた（ $p<0.05$ ）。

【考察】2型糖尿病と異なり、グルカゴン濃度に2群間での差は認められなかったが、糖負荷後のグルカゴン変化率に着目するとGDM患者においてDiet群とInsulin群で糖負荷初期（15分、30分、60分）の変化率に差が認められた。このことから、GDM患者においてグルカゴン変化率を評価することでインスリン治療が必要な患者を発見できる可能性が示唆された。

連絡先-053-435-2786